

佳作

やちこうコーチ

鹿児島県 鹿児島市立広木小学校一年 濱崎 大智

ぼくのおかあさんは、テニスをならいはじめました。テニスのれんしゅうに行く日は、いつもごきげんです。れんしゅうのあとは、

「つかれた。」

とよくいうけれど、ニコニコしていてもたのしそうです。

「おかさんは、テニスじょうずなの。だから、たのしいの。」

ぼくは、おかあさんにききました。

「ボールがまっすぐとばないとときもあるし、ネットになることもいっぱいあるよ。でも、テニスはすごくたのしいよ。」

と、おかあさんはいいました。

じょうずにできないのに、なんでたのしいんだろう。ぼくは、なにをするときもじょうずにできない

と、いやになっておこってしまいます。だから、そんなことをいうおかあさんがふしぎでした。

たのしそうにしているおかあさんを見ていたら、だんだんぼくもテニスをやりたくなって、ならうことにしました。

はじめてれんしゅうにいった日、ぼくはとてもきんちょうしていました。コーチがボールをだしてくれて、みぎにきたボールはみぎでうちかえます。でもからぶりばかりで、なかなかじょうずにうてません。

ぼくは、だんだんいやになってきました。もうやりたくないとおもったとき、

「おいしい。ふりかた、じょうずだよ。」

と、コーチがいつてくれました。

ボールがまっすぐとばなくても、

「ナイス。いいよ。」

と、ほめてくれました。

じょうずにうてなくてくやしだけれど、いつもコーチはおうえんしてくれます。だから、だんだんたのしくなって「がんばるぞ」と、どんどんやるきができました。

このときぼくは、

「あっ、おかあさんとおなじきもちだ。」
と、きづきました。

ぼくは、おともだちがうまくできないのを見ると、

「ぼくのほうがじょうずだよ。」

と、ついじまんしたくなります。おともだちがさか

あがりのれんしゅうをしているとき、

「まだ、できないの？ぼくは、もうできるんだよ。」
と、いって、クルンとまわってみせると、おともだちはすこしかなしそうなかおをして、どこかにいってしまいました。このとき、

「がんばれ。もうすこし。」

と、いえたらよかったなとおもいます。

だれかがじぶんのためにおうえんしてくれれば、
がんばるちからになって、たのしくなります。

だから、なにかをいっしょうけんめいがんばっているひとがいたら、ぼくもコーチのように、おうえんできるひとになりたいです。